

テレビの中継放送

学園だより

№5
1973
3月31日発行
財団法人
中国四国酪農大学校

巻頭言

仲間はふえている

校長 花田 時 太

昭和三十六年創立以来十二年を
経過した本校も、そのうち財団法人
人に移行して既に九年目を迎え、
今や卒業生数も総計三百名を数え
るに至りました。

これら卒業生諸君の大部分は酪
農自営に、あるいはその他の農業
関係業務に、また一部には家庭事
情等により他産業に従事している
者もあるわけですが、それぞれ各
地域において、次代を担う若い推
進力となって活躍されていること
は、誠に喜ばしい次第でありま
す。本校卒業生数三百余名は、一
般学校のそれに比べれば誠に微々
たるものに過ぎませんが、年々三
〇〜四〇名程度の僅少なから自ら
の手で農業を守り抜こうとする精
鋭の集積であることを思えば、そ
の意義は誠に大きく貴重な存在と
言わなければなりません。

事実本校卒業の諸君が中国・四
国各地域において、農業自営に取
組む傍ら、四日クラブを始め、各
種協議会、研究会等の幹部とし
て、あるいは中堅として地域農業

推進のために重要な役割を果たし
つつあり、本校教育事業の成果が
着々と実を結んでいることを喜ぶ
とともに、取組んでいる各位の不撓の信念
に敬意を表する次第です。

今や農業就業人口の減少は世界
的傾向で、わが国も例外ではな
く、個々の経営は規模拡大の方向
をたどりながらも、離農脱落する
者は後をたたず、全体の農家戸
数、農業人口は年々減少の傾向を
示しております。

このことは現代社会の極めて流
動の激しい中において、農業を取
巻く諸情勢がいかに厳しいかを物
語るものと言えましょう。

然し一般農業人口は減っても、
本校を卒業し自らの手で農業を守
って行こうとする仲間は年々ふえ
ており、現在学校では一、二年生
の諸君が先輩の後を追って、日夜
学習に懸命の努力を続けておりま
す。

三百名の仲間はやがて四百名、
五百名、そして千名とその数を増

目次

巻頭言	花田時太	1
牧場の近況		
第一牧場	森 大二	2
第二牧場	広友元一	3
	金田 清	
同窓会のしおり		4
山口県支部	松永博視	
各支部の発足		
海外だより		4
かんとつの駆虫	杉山哲也	6
大学校日記		7
訃音		8
池田雅則君を悼む		
県立三期生	穴戸圭次	
杉村茂君をしのんで		
財団六期生	長綱義則	

していくでありましょう。特に最
近これら同窓生の集いが各地で開
催される機運に至っていること
は、誠に心強い限りで、先輩後輩
互いに手を取り合って、この難局
打開に邁進されんことを願ってや
みません。



近況

を占めています。日頃の放牧、運動の効果が発揮され、十産以上を期待することも容易に感じられます。

購入飼料が年々高騰している現在、自給飼料の生産確保に努めなければなりません。

経産牛中六産以上が五一、三%を占めています。日頃の放牧、運動の効果が

表1. ホルスタイン種年齢別の構成

年次	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	計
頭数	2	18	1	2	3	3	4	7	5	5	50
%	4.0	36.0	2.0	4.0	6.0	6.0	8.0	14.0	10.0	10.0	100.0

表2. 産歴別の構成

産歴	1産	2産	3産	4産	5産	6産	7産	計
頭数	7	2	2	4	3	11	8	37
%	18.9	5.4	5.4	10.8	8.1	29.7	21.6	100.0

第一牧場で管理する一四、七ヘクタールの面積では絶対量は不足しますが、草地六ヘクタール、休耕田〇、六ヘクタールの借地と、

▼自給飼料順調に確保
 牧草、飼料作物共その利用体系によって牧区を定め、土壌改良に努力した成果が漸く現われ、自給飼料の確保も順調にしております。

関係は表5のとおりであります。

表3. 牛群別構成

牛群	A	B	C	計
頭数	21	13	16	50
%	42.0	26.0	32.0	100.0

表4. 牛群の改良目標

体高	体長	胸囲	体重	能力指数	搾乳性
140cm	175cm	205cm	680Kg	150	2Kg以上

表5. A群の測尺値および能力状況

体高	体長	胸囲	体重	能力指数	搾乳性	高等登録体格点
139.5	168.6	202.0	643.7	158.6	2.8	78.4

表6. 47年度自給飼料生産利用状況

利用区分	面積 ha	10a当り生産量 (A)	N 1Kg当り生産量	10a当り利用量 (B)	利用率 B/A
刈取、放牧利用	3.1	7,793Kg	207.8Kg	5,381Kg	69.0%
放牧、刈取利用	1.0	10,794	244.8	7,377	68.3
乾草、放牧利用	3.0	5,696	238.9	3,567	62.6
放牧利用	6.2	6,363	336.0	3,038	47.4
乾草利用	6.0	3,300	263.3	2,247	68.1
平均	19.3	5,765	220.0	3,475	

(注) 2 haは利用区分外利用



乾草の調整と運搬

第一牧場

暖かい冬で心配していた雪も少なく、はや、牧野も緑を増し、牛共の放牧も例年より幾分早くなるだろうと楽しみにしている昨今です。

▲基礎牛能力を發揮

第一牧場に繋養するホルスタイン種は現在五〇頭で、逐次後継牛も育ち牛群らしくなり、更新も円滑になってきました。

一昨年から各個体をA、B、Cに系統、能力、飼養管理の容易性等から総合的に分類し、A群を基礎牛、B群を準基礎牛として血統交配、あるいは系統交配を実施し、系統保留を図りながら牛群の改良に努め、酪大として特徴あるホルスタイン種を造成する所存です。

これによって牛体の健康維持、耐用年限の延長等を図り、経営の安定に頑張っております。

▼疾病による損失

乳房炎の発生には例年悩みの種ですが、昨秋全国的に流行した流早産が、ホルスタイン種のみならず七頭発生し(四七、八一四八、二)、大きな打撃を受け、またこれに追打ちをかけるように、昨年十一月・十二月十頭の汎骨髄ろうの発病があり、育成牛二頭死亡、成牛一頭廃用と大きな打撃を受けました。その後事故も回復し、春の訪れとともに能力を發揮するものと信じ、場員今年こそはと頑張っています。

(第一牧場長 森記)

表7. ホルスタイン種1日1頭当り自給飼料給与状況(47年度)

月別	乾草	青刈り	埋草	放牧	計	備考
	生草換算 Kg	飼料カブ Kg	サイレージ Kg	採食量 Kg		
4	14.5	—	12.3	25.3	52.1	①放牧 4/7~11/24 ②カブ給与 11/13~
5	9.5	—	—	42.3	51.8	
6	10.0	—	—	47.2	57.2	
7	10.0	—	—	45.9	55.9	
8	11.0	—	—	48.0	59.0	
9	16.0	—	—	40.3	56.3	
10	19.5	—	—	43.8	63.3	
11	23.5	6.7	15.2	23.6	62.3	
12	18.5	14.0	28.0	—	60.5	
1	23.0	24.6	16.9	—	64.4	

牧場の

— 第二牧場 —

(G) に問題があり、増体だけからすれば、長期の肥育はどうかとも思われるが、脂肪の白色化の点では三カ月程度では白色化は望めない。

(2) 肥育する牛は、喰い込み、増体のよい牛で行なうこと。

(3) 濃厚飼料給与量に無理があり、増体(D・G)目標〇、九で給与を行なったが、全頭、ケトン尿症を発病したので、目標は〇、七〇、八程度がよいように思う。

(4) 肥育中期ごろまで、少々の運動をした方がよいと思う。

(5) ビタミンE剤の投与は、一日5gでしたが効果は見られなかった。投与量、期間に検討の必要がある。

以上で概要の報告を終わりますが、最近、ジャージー牛の肉価格も高く取引されています。しかし依然として、ほかの牛より安い現状であり、方策を樹てる必要があります。

卒業生の皆さん、酪農をとりまく情勢はいよいよ厳しいようですが、一層研さんされ、酪農経営の安定化に努力されんことを祈っております。(第二牧場長 広友元一)

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

ほど多かったため、牧草の生育は概して良好であったといえます。例年ならこの雨が六月上、中旬の牧草の一番刈の時期に集中して降るため、良質の乾草を調製するのが困難でしたが、幸い去年は天候にめぐまれたせいもあって、雨にほとんど会わず、青々とした乾草が収穫できました。▼冬期の貯蔵

飼料としては、乾草とサイレージを各々五〇%給与するのが理想的でしょうが、四十五、四十六年と二

カ年間サイレージを調製した結果調製、給与体系の未整備で、必ずしも満足といえる状態ではありません

でした。広い草地と大型機械を持つていても、半年間、百頭分のサイレージを貯蔵することは一口

にいて大変なことです。▼放牧

下における牧草の品種比較試験を実施し、三年目になりましたが、

採草用として優れた品種が放牧草としても有望のようです。酪農家

もトウモロコシ、ソルゴー、イタ

リアン・ライグラス等の種子は品

種を指定して購入するようになり

ましたが、牧草についてはまだまだ

だのようです。今までの結果では

オーチャード・グラスはキタミド

リ、アオナミ、ペレニアル・ライ

グラスはペートラ、コンピ・ワイ

ドタイプ、シロ・クロローバではカ

リフォルニア・ラジノ、ニュージ

ランド・ホワイトが有望のようです牧草についてもいずれば地域

や、利用目的に合った品種が解明

される事と思います。▼梱包サイ

レージをビニール・スタックサイ

ロで三トンばかり試験的に調製し

てみました。材料が雨に会い、良

くなかったのですが、出来上がり

はきわめて良く、牛も好んで食う

ので、比較的失敗の少ないサイレ

ージの調製法だと思えます。唯、

一梱包が三十キロにもなると、

取り扱いに不便なのが欠点です。

百日程度の貯蔵ではトワインはほ

んど切れずに残っています。

▼日本列島改造論は列島改造はか

りでなく、人間性も改造しつつあ

る感じですが、物価は上昇し、人心

は殺伐になり、暮らしにくい世の

す。(第二牧場 金田 清)

中になっておりますが、蒜山には

まだまだ自然が残っています。清

流に釣り糸を流すと、心がすがす

がしくなる感じがします。▼いく

ら工業優先といっても、カメラや

自動車を食べて生きて行けるはず

がありません。私達自然を相手に

食品の生産にたずさわっている者

は、国民の食糧を生産している

という使命をもって、頑張ってい

なければならぬと思えます。

▼今年も昨年に続き暖冬で、雪も

あまり降りませんでした。何か天

変地異が起こらねばよろしいが、

卒業生の皆様の御自愛を祈りま

牧場をとりまく、ここ三木ヶ原

には、自然を求めて来るレジャー

客は、ふえるばかりです。ふしぎ

に牧場のジャージー牛に、ダニが

かなくなったようです。自動車の

排気ガスがダニにとっても公害か

もしれません。レジャー客の増加

は、牧場管理に困ることも、しば

しばありますが、少々は我慢して

います。

今年の冬は、昨年にも増して、

雪の少ない暖かい冬で、牧場はう

れしい昨今ですが、雪が降らない

で嘆いている人々があるので、挨

拶にも気をつかうしまつです。

第二牧場の二月一日現在の飼養

頭数は、ジャージー種一六頭

(内、搾乳牛六頭)、ホルスタ

イン種一頭、計一七頭です。

職員は、広友、杉山、金田、美土

路、川村、三牧の六名で、学生諸

君とともに頑張っています。

さて、前回の学園だよりで書き

ました、ジャージー種肥育試験の

成績ができましたので、その概要

をお知らせします。

(1) 老令牛は一日増体量(D・

G)に問題があり、増体だけから

すれば、長期の肥育はどうかとも

思われるが、脂肪の白色化の点で

は三カ月程度では白色化は望めな

い。

(2) 肥育する牛は、喰い込み、

増体のよい牛で行なうこと。

(3) 濃厚飼料給与量に無理があ

り、増体(D・G)目標〇、九で

給与を行なったが、全頭、ケトン

尿症を発病したので、目標は〇、

七〇、八程度がよいように思う。

(4) 肥育中期ごろまで、少々の

運動をした方がよいと思う。

(5) ビタミンE剤の投与は、一

日5gでしたが効果は見られなか

った。投与量、期間に検討の必要

がある。

以上で概要の報告を終わります

が、最近、ジャージー牛の肉価

格も高く取引されています。し

かし依然として、ほかの牛より安

い現状であり、方策を樹てる必要

があります。

卒業生の皆さん、酪農をとりま

く情勢はいよいよ厳しいようです

が、一層研さんされ、酪農経営の安

定化に努力されんことを祈ってお

ります。(第二牧場長 広友元一)

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×

× × ×



トラクターの実習

学校からの呼びかけに応じて、つぎつぎに本校同窓会支部が結成され、活動に入っております。まだ結成されていない地区での早急な結成が望まれています。大部分の地区に支部が結成されましたら、代表の方に集まってい

○同年八月十九日岡山県美作支部結成、出席者十四名、会長片岡孝志（県立二期生）を選出。○四十八年二月十七日岡山県備前支部結成世話人会が岡山市で開かれ、三月十八日に設立総会が開かれる予定。

山口県支部

ただき、全体の同窓会を開催したいと思っております。各地に結成されました支

さる、四十七年七月に山口市で第一回の山口県支部同窓会を、花田校長先生をはじめ、山口県畜産課長、普及教育課長のご出席を頂き開催しました。

各地に同窓会支部生まれる

部の結成状況はつぎのとおりです。○四十七年五月六日高知県支部結成出席者六名、会長竹松史治（財団三期生）を選出。

同窓会の出席者は八名で、現在直面している問題点、また、将来の構想などを語りあい、明日への新たなファイトを胸に、第二回目の同窓会を楽しみに別れました。今後同窓会は、周防と長門の二区で毎年一回開催し、四十八年度は長門地区で開催される予定です。（山口県支部長 松永博視）

○同年七月九日山口県支部結成、出席者八名、会長松永博視（財団四期生）を選出。

新春恒例の成人の日に開催される防府市内一周駅伝競走に、わが防酪青年部は今年も参加しました。

○同年七月三十日香川県支部結成、出席者七名、会長植田憲治（財団二期生）を選出。

全コース三四・六キロメートルを六区間で競い、防酪青年部は通算時間二時間九分五二秒で、一般高校の部五四チーム中見事三二着



（山口県防府市 四期生 松永博視）

でゴールインしました。この記録は昨年と比べると大幅な進歩で、昨年十二月初めからのトレーニングの甲斐あって、全員自己のベストをつくすことができました。メンバー六人のうち、三六歳を最高に三〇歳以上三人で、午前中成人式に出席した若者と妙な取り合わせでした。

私の走った二区は町の中を走り抜けるため、成人式を済ませた晴着姿のお嬢さん達の盛大な拍手の中、五・四キロメートルを二一分七秒で三区のランナーにタスキを渡しました。

駅伝に参加しない部員も選手の輸送や、各区間での応援に協力し、駅伝終了後「しるこ」で乾杯し、お互いの健闘をたたえ合い、明日からの酪農にもこのスクラムを基に頑張ろうと大いに意気があがりました。



本日は、校長先生を初め皆様方からのお便りを受け取り、うれしく読ませていただきました。貴地は今冬は積雪も多い様ですね。

さて、小生、月日のたつのは誠に早いもの、期待半分、不安半分で日本をあとにして早や十カ月、アメリカ生活も二カ月余りを残すのみとなりました。毎日が牛との明け暮れで、一年が終わろうとしています。

この一年の体験は、小生にとりましてはこれからの人生に大いに役立つものでありました。日本からではとても見ることも出来ない、アメリカ社会の細かい一端まで知ることが出来ましたし、また、ふり返って日本も世界の中の日本として見つめる事が出来ました。

うです。イメージチェンジとまではいきませんが、今までにないものが身についた気がします。◇さてさて、アメリカは何もかもデカイですね。土地の広さは言うまでもなく、牛もデカイし、女性もデカイ。

小生、当地でたいへんもてまして、スクールへ行つては日本の紹介をしたり、ギターを弾いたり、歌ったりしております。

でも、寄ってくる女性はオバアちゃんか、中学生以下、年頃の娘さんは皆アベック、ああ実習生のつらさよ！早く帰って彼女に逢いたいなどと、毎晩思いながらにをしのんで歌っています。

◇くだらぬ長話はこの位にしますが、七期生が後からきてくれるらしいからですね。後輩達がどんどん続いてくれば、曲りなりにもつとめ上げた一先輩として、この上もない喜びです。意見などおこがましいですが、自分が一年体験して感じた事です。

そして、何よりもこの一年、言語、習慣をまったく異にする当地で、病氣一つせず、ノイローゼにもならず牛と取り組めたこと、この精神面での自分自身の成長は、大きな自信につながりました。

日本で紹介されているアメリカは、ごく一部分にすぎない事、それを参考にするのはけっこうですが、うのみにしない事、あくまでも自分で体験しなくてはわかりません。

自分自身の今までの性格も、このアメリカ生活で多少かわったよ

ミドルウェストには日本人はあまりいないように感じていたが、ずい分います。

何よりも体が資本ですので、それを大切にすること、そして早く自分もアメリカ流になる事です。アメリカ人はおけるとそれこそまるで王様のようになりますが、いつまでも根にもっていません。こっちが失敗すればすなおにあやまり、もう後はケロリとしていれればいいんです。また、こっちからみずけずけいってかまいません。とにかく、郷に入っては、……のたとえで、早くなれる事ですね。

英語(実用)を勉強されておくのはこの上ありません。以上、自分の体験からの考えをのべました。

それでは、皆様お元気で、お目にかかるのを楽しみにしております。

一九七三年一月一日

カンサス州アピレンにて
第六期生 伊藤裕治

× × ×

前略

今、私は一カ月の大学での学科研修(英語特訓)も終わり、三カ月の短期実習に出ています。

大学のある町モスレイクから六十マイル離れた所の町ウェナチにいます。

この町は、ワシントン州でも四番目に大きな町で、リンゴ地帯です。

私はこの町のリンゴ作りの農家に入りました。そしてリンゴに關係した作業をしています。この短期実習の目的はお金を儲けるための実習です。

今、十時間働いています。時間割りは朝七時十二時まで五時間休み無し、午後一六時まで休み無し、計十時間、最初は大変疲れましたが、今はもう馴れてあまり疲れません。

まだ、ワシントン州に居てカーネーション牧場を見学に行っていない。行こうと計画は立てていますが、なかなかチャンスが無くて。

一番心配していた英語も何とかやっています。まだ、ノイローゼにならない所を見ると何んとか通用しているでしょう。

でも私の入っている農場は日系人で、日本語は私より上手なよう、ミスター・ロルフが(広島県出身一世で有る)十七歳まで日本に居たそうで、ここアメリカへ来てもう三十六〜三十七年になるそうです。ミセスは日系アメリカ人で、血液は純日本人です。

ミセスの母親が岡山県出身で、ミセスは二世です。

ここウェナチは白人の町なので、黒人や黄色人種は全然といって良いほど居ません。

白人の中へ黄色人種が入った時の周囲の目はひどかったそうです。

今ではリンゴ、梨作りで、トックラスの人で、ウェナチでも有名です。

このリンゴ園は五十町歩(二五エーカー)あり、一人で行なっています。(それと研修生)

毎週日曜日は休みで、教会へ行ったり、一日中寝たりで過ごしています。

大学では土曜、日曜と休みで、一週間に二日休みがあるので大変良いと思った。

二泊三日で旅に出る人も多いようです。大体全部の家庭にキャンピングカーや、モーターボートがあり、これらをけん引して旅に出るようです。

ここワシントン州はアメリカ全州で一番多くの森と湖があります。

湖辺にキャンピングカーを置き、キャンプして、湖で水上スキーをしている風景に沢山ぶっかかりました。ここアメリカはレジャーといったものが大変重視されているようで、モーターボート等とても安いようです。

話は変わりますが、ここ中田宅には四人の研修生(一人先輩六回生)が入居しています。

七回生の我々は酪農専攻二人、肉牛専攻一人、先輩はリンゴ専攻です。

四人はキャビン(粗末な小屋)で自炊生活をしています。我々の作る料理はもう決まっています。

(カレーライス、スパゲッティ) この町は日本食があるので大変助かります。(ラーメン、とうふ、しょうゆ、米)

短期実習は自分の専攻とあまり関係がありませんが、一生懸命やっています。

英語はやはり単語を知っておかないとだめですね。(数多く)英会話等は問題じゃないように思えます。とにかく単語のようです。

まだ、酪農家に入っていないので、アメリカ酪農に大変興味があります。アメリカの農業者は「誇りと自信を持って農業をしている」この俺がアメリカ大陸の人々の食糧を生産しているのだ」と言ったふうです。

日本では、農業者は「何んだ百姓か」と言ったふうに見られますが、ここアメリカではそうは見られないように思えます。

農業者の生活は高いように思え、良い生活をしています。これから私のアメリカ農業と日本農業の比較が始まり、これから自分のやろうとする農業に大きくプラスになるでしょう。これから私のアドベンチャーが始まります。

では、今の位置を少し書いて見ます。

ここウェナチはシアトルより二〇マイル中央部に入った所で

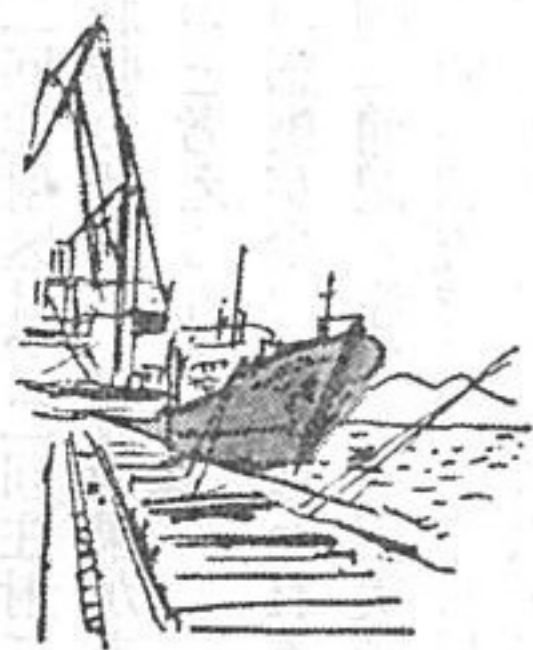
す。もうここは十一月中旬のように寒く、冬の寒さが想像出来ません。

ここへ来てスキヤキパーティーを四人の研修生と一緒に作り、二十一名の高校生(男女)と大人四人と我々、計二十九名、外人はとも喜んでくれたように私には思えた。本当はどう考えているのか判りません。

ああ、外人ではなかった、我々が外人なのです。でも、四人で町へ出てついアメリカ人を見て「あ、外人がころんだ」と言っています。

おもわずそういう言葉が出ます。ここアメリカにきててもやはり我々は日本人中心に考えているようです。

ではこの辺で失礼します。
一九七二年九月十七日
ワシントン州ウェナチにて
第六期生 原 慶明



▼酪農技術解説

肝 腔 の 駆 虫

第二牧場 杉山哲也

かんでつによる被害

牛の内部寄生虫のうち、肝腔は感染率が高く、乳用牛の三〇―四〇%が感染していると推定され、発育障害や、栄養の低下、泌乳量の減少など大きな被害を受けています。

農林省の調査によると、肝腔症のため、年間一頭当り乳量の減りは六五五Kgで、金額にして約三万四千元の損失といわれています。

この肝腔症の防遏は、家畜伝染病予防事業の一環として、昭和二十七年頃から家畜保健衛生所において集団検査による摘発、駆虫が実施され、また近年は、農業共済でも特定疾病の損害防止事業として防遏が進められています。

この間、駆虫薬も改良され、副作用が少なく、少量で飼料に混入投与出来るものが開発されました。その結果飼育者が簡単に駆虫出来るようになり、肝腔に対する衛生思想の向上から、毎年一済検査

による摘発、駆虫が実施されていますが、感染率は年々上昇の傾向がみられます。

肝腔の感染率上昇の原因として肝腔の中間宿主である、ヒメモノアラ貝に殺効果があった。PCP（水稲の除草剤）の使用禁止で、

ヒメモノアラ貝が増加したことも要因と思われますが、肝腔の濃染地域では、低地の草・稲藁などから、たえず感染しているため、一回の駆虫では効果がなく、また駆

表1 内服薬の1回投与による駆虫成績

検査番号	投与量	投与月日	投与前虫卵数	投与後の虫卵数				
				19日目 11/8	31 11/20	48 12/7	62 12/22	62 12/22 時計皿法
1	20mg/Kg	10/20	23	25	17	26	44	62
2	"	"	27	2	11	1	16	20
3	"	"	2	0	1	4	0	2
4	"	"	1	1	0	2	2	0
5	"	"	6	7	6	6	4	14
6	25mg/Kg	"	18	0	0	2	2	1
7	"	"	3	0	0	1	0	8
8	"	"	5	0	0	4	4	7

表2 注射薬の1回および2回投与による駆虫成績

試験家名	試験区別	試験頭数	注射月日		注射前後の虫卵検出頭数および率						
			1回目	2回目	9/14	10/8	14日目 10/22	31 11/8	43 11/20	60 12/7	75 12/22
A	7.4~ 7.5mg/Kg 1回	7	10/8	—	—	100%	14.3%	28.6%	42.9%	71.5%	85.7%
					—	7/7	1/7	2/7	3/7	5/7	6/7
B	7.3~ 7.5mg/Kg 2回	12	9/14	10/8	100	9.0	0	9.0	16.7	25.0	33.4
					12	12	12	12	12	12	12
	対照区	9	—	—	0	0	11.2	11.2	33.4	44.5	85.7
					9	9	9	9	9	9	7

虫薬の投与量が適正でない場合は全く駆虫効果がなく、これらの糞を水田に入れるため、感染源を断つことが出来ないと考えられます。

かんでつの駆虫

このような考えから少数例ですが、肝腔の駆虫薬投与後、長期間肝腔卵の消長を調査した結果を基に、駆虫について説明します。

◎表一は現在使用されている、内服の駆虫薬を一回投与した成績で

使用説明書は、体重1Kg当り一五―二〇mg投与となっていますが、二〇mgと、二五mgの二区に分けて投与し、投与前と、投与後、一九日、三十一日、四十八日、六十二日目に、一定量の糞で、肝腔卵の数を調査しました。投与後、三十一日目の成績をみますと、二十mg区は、陰性一例で虫卵数も投与前とあまり変わらず、二十五mg区は、全例陰性で効果が認められました。しかし、四十八日、六十二日目は、各区とも全例肝腔卵が検出されました。

肝腔は、夏から秋にかけて感染が多く、感染後、約八十日で産卵を開始すると云われています。このことから、二五mg投与区は、成虫は死滅しても、駆虫薬の投与前に感染していた幼虫が成長し、産卵を開始したものと推定されます。

◎表二は、最近きわめて高い駆虫効果が報告されている。注射の駆虫薬を、一回注射と、二回注射で効果判定した成績で、二回注射区と、同居の肝腔卵陰性牛を対照区とし、表一と同じ方法で虫卵検査を行ないました。紙面の都合で個別の虫卵数は省略しましたが、注射後、三十一日目の成績は、一回注射の場合、二八・六%に肝腔卵が認められ、駆虫効果は、七一・四%でしたが、二回注射は、九%に肝腔卵が検出され、九一%の駆虫効果でした。その後、各区とも次に虫卵の検出頭数が増加し、七十五日には、一回注射区と、最初虫卵陰性であった対照区は、八五・七%に虫卵が検出され、二回注射区も、三三・四%に虫卵が認められました。

- 八月末頃感染したことが推定されます。二回注射区は、二回注射により、肝腔の幼虫にも殺効果があつたものと考えられます。
- 肝腔の感染が少ないと思われる一月中旬に前記の注射を一回実施した三十頭の調査では、三十日目二〇%、七十九日目は、八六・三%に虫卵が認められ、十二月末から一月にかけても感染していることが判明しました。
- ◎少数例の調査ですが、このように、駆虫薬の投与量が少ない場合は、全く効果がなく、また適正使用で高い駆虫効果があつても、感染初期の虫体には効果が認められず、濃厚感染地帯では感染の機会が多いため一回の駆虫で目的を達する事は困難です。
- ◎このため肝腔の予防および駆虫は次の事を注意して下さい。
- 1、検便は年一回必ず全頭受け、牛を導入した場合はその都度検便する。
 - 2、溝や、湿地の草は出来るだけ給与しない。
 - 3、堆肥舎を完備し、生の糞を水田に入れない。
 - 4、駆虫薬を投与する場合は、必ず牛の体重を測定し、薬の説明書に示す範囲の上限で投与量を算出する。
 - 5、駆虫は二―三カ月の間隔で二回以上行なう。
- 以上、簡単ですが、肝腔の駆虫について説明を終わります。なお疑問の点がありましたらご連絡下さい。皆様のご健康とご活躍をお祈りします。



大学校

日記

●四十七年四月七日

第八期生の入学式挙行。入学生三十五名で、財団法人として発足以来、始めて女子学生不在の入学となった。

●四月七日

第一牧場の放牧開始。本年は暖冬のえいきょうから牧草の伸びが早く、昨年より、早い放牧となった。

●四月三十日

蒜山地区バレーボール大会に学生が出場、日頃の練習不足から第一回戦で黒土会に敗退した。

●五月二十七日

R.S.Kの「ワイドサタデー」のテレビ生中継が行なわれた。当世女子学生気質について取材されたので、生憎く女子学生不在のため、急きよ卒業生など五名を招集した。この時ばかりは男子学生はさしみのつまのようなものであった。放映後の反響大きく(?)、神戸市の酪農家からせひ嫁にとの申込みがあった。

●五月

今年は例年のない好天に恵まれ非常によい一番刈の乾草が開始された。

●六月二十一日

三木ヶ原寮に半数入寮。昨年一年利用を中止していたが、学生の強い希望もあり、三木ヶ原寮の使用を開始した。

●七月十二日

連日の大雨から各地に大きな被害をもたらしたが、学校では水源池が大荒れとなり断水し、食堂では雨水を使ったり、近所にもらい水に行く仕末であった。復旧には職員学生ずぶぬれで悪戦苦闘の末やっと通水した。

●八月十一・十二日

第七期生の集合研修開催。実務研修の成果発表の後、八期生と時期を同じくして集まった第六期生の諸君との交換ソフトボール大会を実施した。夜は三木ヶ原で盛大なキャンプファイヤーを実施、青春の良き思い出となったことだろう。

●九月三十日

第八期生は前期の学習を終り、先進地での酪農実習に散っていった。本年度からは二カ月間づつ交替で学校に残り、濃密指導を受ける校内実務研修制度が設けられた。

●十一月十五日

大型トラックターの免許試験を蒜山高校のグラウンドで実施し、受験者全員が合格した。この日あいにくの大雨で泥んこの中での試験となり、終了後のグラウンド整

●十一月十六日

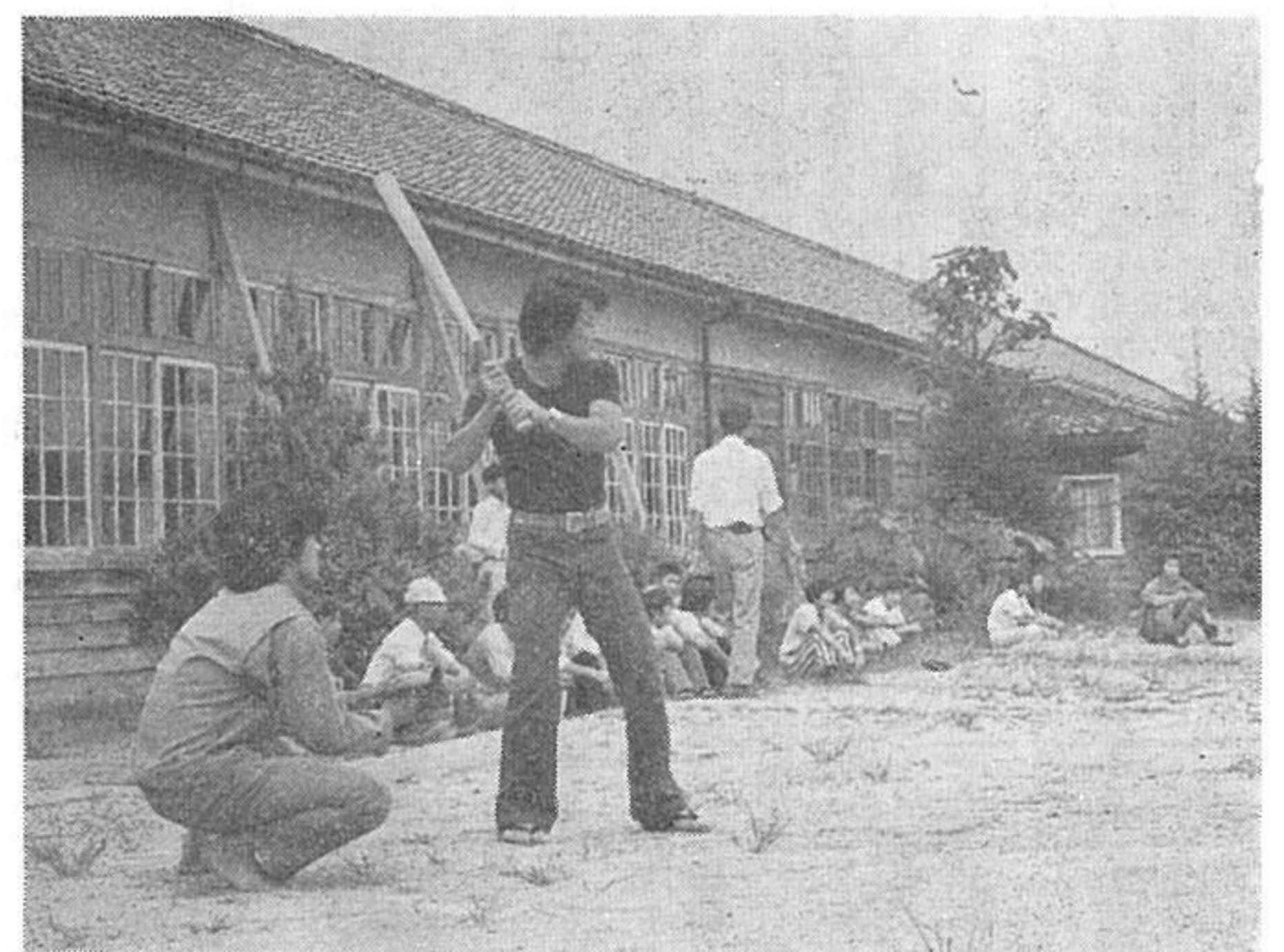
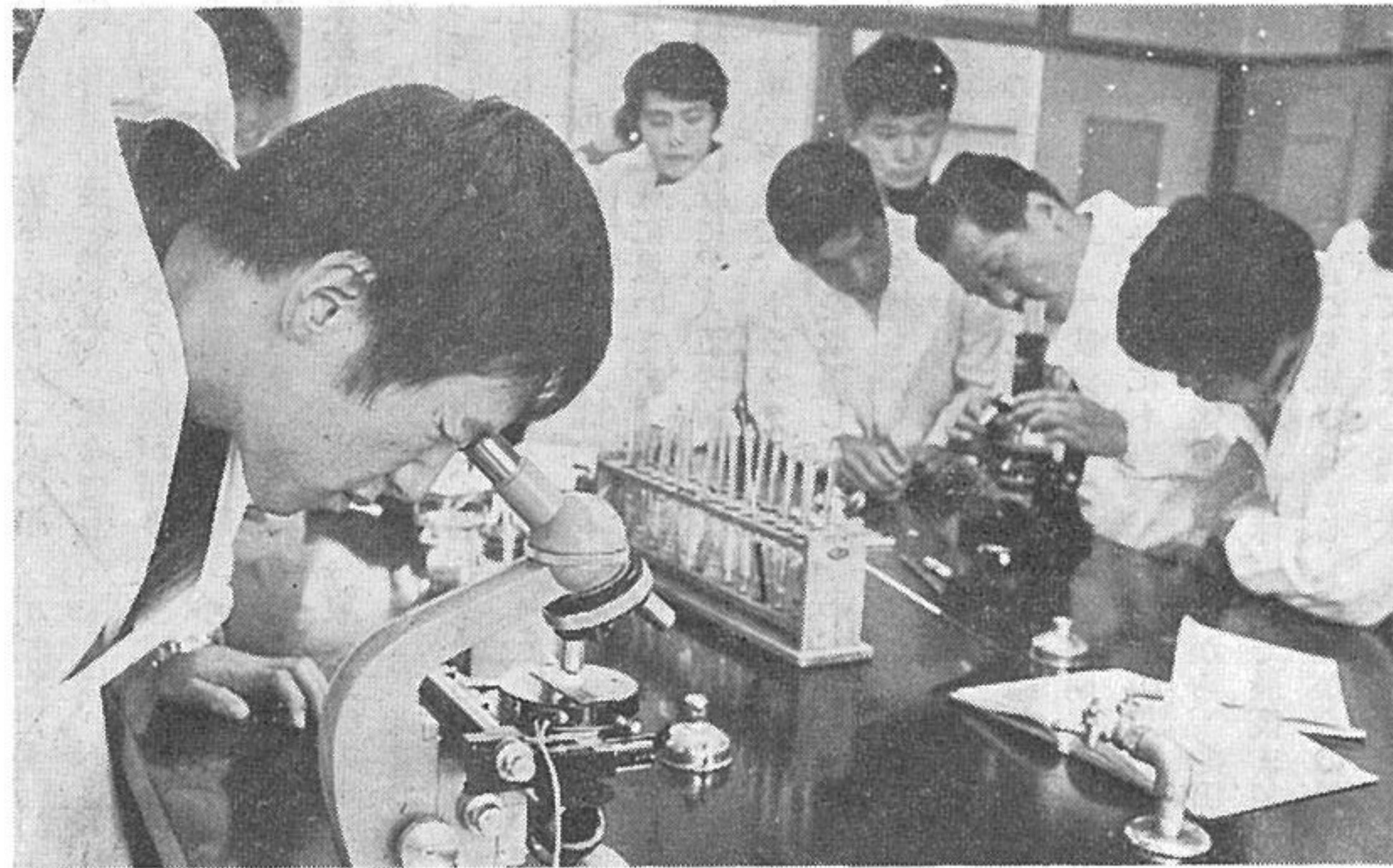
大型トラックターの免許試験を蒜山高校のグラウンドで実施し、受験者全員が合格した。この日あいにくの大雨で泥んこの中での試験となり、終了後のグラウンド整

●十二月二十五日

一日遅れのクリスマスパーティーを学生主催で本校講堂で開催した。学生の班別の演劇やかくし芸、途中からは招待された村の若い娘さんも加わり、ゴーゴー大会へと発展、青春の意気を発散させていった。

●四十八年一月九・二十日

毎年開催される家畜人工授精講習



集合研修の交換ソフトボール

習会を全員受講、一月三十日・三十一日に修業試験が行なわれた。皆んなの努力の結果そろって試験に合格、家畜人工授精師が誕生した。

●二月七・八日

第九期生(昭和四十八年

●十二月五日・九日

備が大変であった。第七期生全員の修学旅行を南九州地方に実施した。幸い好天に恵まれ、学生達の将来の新婚旅行の下見分といった具合で、楽しく旅行を終った。

●二月二十一日

国際農友会のあっせんで一年間の米酪農研修のため、第七期生の政広公文君(岡山県)が発した。なお、同期生の井上和彦君(岡山県)が農業研修生派米協会(岡山県)があっせんで、六月下旬二九年の予定で米国で研修の予定である。

●三月二十八日

第七期生の卒業式が挙行され、二十七名(うち、女子二名)の酪農経営士が生まれた。

(教育部)

訃 音

● 県立第三期生池田雅則君
(岡山県真庭郡八束村) は、
四十七年十月十六日
中福田にて不慮の交通事故に
会われ、直ちに倉吉市の病院
に入院されましたが、経過思
わしくなく、十一月一日つい
に他界されました。

● 財団第六期生杉村茂君 (岡
山県真庭郡川上村) は、倉敷
市の水島酪農組合の人工授精
師として活躍しておられまし
たが、白血病という不治の病
にとりつかれ、四十七年十二
月十六日不帰の客となられ
た。

これからの活躍が期待され
た両君のため、ご冥福をお祈
りします。

池田雅則君を悼む

県立三期生 六戸 圭次

大変悲しい事ですが、同期生の
池田雅則君が、去年の十一月一日
に、車の事故の巻き添えに会い、
余りにも若くして、ついに帰らぬ
人と成ってしまいました。倉吉の
病院に入院しましたが、一度も正
気が戻らず他界してしまい、年老

いた母や、死さえ分らぬ二人の子
供、身重の妻を残して、死んでも
死に切れなかつたろうと胸が痛み
ます。思えば私と雅則君とは、酪
大を通して知り、良き友と成って
家族共に行き来をして居りました
が、最も忘れ得ぬ、帰らぬ友と成
ってしまいました。在学中は、地
元でも有り、年齢も少し上と言
事等、似た所も多く、人間的にも
馬が合った様に思います。彼は、
入学時には既に、人工授精師免許
も、車、それに、トラクター免許
と、卒業時の免許を取得して
社会人としての知識も深く、少し
異色の学生でも有りました。又、
負けぬ気が強く、時には悩みも持
って居ましたが、大変気のいい人
間で、太く、ユーモアにも富み、
スポーツでも、相撲や、柔道を好
み、力も有って、卓球とか、野球
には、どこか、どこか無さを感じ
させ、彼を物語っていました。大
きな声の持ち主で、教室で、作業
実習で、彼が居る居ないは、すぐ
分る存在でした。物事の応用も広
く、頭の切れも、非凡な持ち主だ
ったと思います。在学当時から、
俺は、太く、短かく生きるんだと
若いのに手相や、縁起を、大変気
にしている、いつも話していたよ
うです。特に近年の彼は、自分の
予感を物言うかのように、精神的
で仕事も多く、大阪へ、岡山へ、
蒜山と、昼夜を問わず動き回っ
て、仕事の帰り、酒も飲めぬ彼

が、飲酒運転の車によって命を落
すとは、不運としか言いようが有
りません。夏の蒜山登山の帰り、
何も履かぬで川での水泳、新見の
共進会帰りの井倉洞、日曜日の鳥
取砂丘へのドライブでのエピソード、三人での京都の修学旅行、卒業後も、彼の結婚式の前夜等あまり飲めぬ彼や、彼の弟と飲み泊った事、魚を、全く食しなかつた彼肉類は好んでいたが、酒が苦手で酒席では、いつも池田の横で、代りに良く飲んでくれた私。広い知識や、考えを語ってくれた彼はもう居ない、生前の人生の広さを思わせる、長々と続く黒い葬儀の列もただ悲しさだけだった。

杉村茂君をしのんで

第六期生 長 綱 義 則

通称、「茂」の愛称で、級友から親しまれて来た彼が、昨年暮れ短い青春の命に、終止符をうってしまった。よりにもよって、あれほど強健な体と、堅実で不屈な精神をもった彼に死の病が取り付きこんな早く死の別れをさせられようとは、誰しも想像出来なかつた事で、今でも信じ切れる事が出来ない。しかし、この事実は、誰も覆えず事は出来ない。悔しい事だが、今はもう黒樾の内の人となし冷たい土の中で永遠の眠りについてた。

「中学時代は、あのしなやかな体から出る速球を柱に、野球部のエースともなり、陸上の中距離ランナーとしても走った彼が……」

「高校時代は、相撲部の主将として、中国大会までこまを進めたほどの彼が……」

ふしの無い竹の様な性格で、感じたら、ズバリ、回り道する事なく、その場で口に出すやっただった。しかし彼が、いつ何と云っても全く、いや味とか、立腹感というものは、感じさせない不思議な性格の持主で、たびたび笑わせてくれた。「異常」が、つけたくな

るほど気が長く。「もしかして、女の子では……。」と、疑ってみたくなるほど精細な神経の持主。一見、彼からは想像つかない事なのだが。時には、あまりもの気の長さに、回りのものが立腹し、又ある時には、「茂のような……」と例えにでさえなるほどだった。だから、彼の性格を、誰もが羨ましく思ったに違いない。

編集後記

◆懸案となっていました本校の同窓会が、各地に続々と生まれ、今後の活発な活動が期待されます。

◆学園だよりも第五号となり、卒業生からのご投稿がだんだん増えてきておりますが、同窓会の活動にあわせ、本だよりを同窓会報に発展させたいと願っていますので各地からのお便りをお寄せください。